

# 文芸OGネットワーク通信



Vol. 17

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1

共立女子大学文芸メディア研究室内

文芸OGネットワーク 代表 稲見 和子

Te l / Fa x 03-3237-2681

発行：2012.9.30

URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei

## 第10回 文芸サロン講座

### — 放送作家・松崎まこと氏による講演会を開催 —

5月26日(土)総会の後、第10回文芸サロン講座が開催された。今回は放送作家の松崎まこと氏をお迎えし、「ケ・セラ・セラ～なるようになる～“放送作家”のお仕事」と題して講演していただいた。講演会場は和やかな笑いに包まれ、盛況であった。講演の感想を川瀬治子さんにお寄せいただいた。



ご講演中の松崎まこと氏

#### 「ケ・セラ・セラ～なるようになる～ “放送作家”のお仕事」を聴いて 川瀬 治子

今回のサロン講座は、代表の稲見さんが在学中にアルバイトで英語を教えていらした時の生徒さんで、その頃からの知り合いという、放送作家の松崎まこと氏を講師としてお迎えして行われました。

これまで携わってこられた主な番組は、TBS ラジオ「荒川強啓デイ・キャッチ!」、ニッポン放送「高嶋ひでたけのお早う! 中年探偵団」等々。受信できない地方もありますが他にも人気番組の脚本を手掛けていらっしゃる。

早稲田大学を卒業後、レンタルビデオ店長、塾講師を経て、91年より放送作家へ転身され様々な番組作りをされたなかで、興味深いお話を色々披露してくださいました。

最初は師匠の助手の仕事から始めて、そのうち少しずつ番組に参

加できるようになったこと、後に師匠の都合がつかない時に任された番組は、依頼者の望んだスタイルがいつもの師匠と同じ作品(つまりコピーの様な)であったにもかかわらず、どうしてもそれが苦しくなり出来なくて、常の師匠なら怒鳴られて当然のところ、意外に「出来ないものは仕方ないな」と、半ば認めてくれた様に言われたということ、局の都合でギャラが突然値切られたり、調査費用が全く認められずかえって足が出たこと等、普段何気なく聞いている番組の向こう側に色々な出来事があり、そしてそれは現在放送中の全ての番組でも同様なのだろうと察せられました。

「大学卒業後、ちゃんとした就職をされなくて(世間的にという意味)お母様は何とおっしゃいました

か」という質問に「ただ呆れていました」と答えられていました。お父様が敏腕の政治記者でいらしたので、夜討朝駆そのままに仕事に取り組んでいらした姿を見て育って、政治記者だけには絶対にならないと、思われたそうです。ただ、自分も「書く」という仕事に自然と向いていったのは、父親の影響があったのではないかというお話でした。

今は脚本だけではなく、ある番組上でひょんなことから受験して合格した映画検定一級という実績から、FM局で映画紹介の番組の企画はもちろん、出演もされるという具合に仕事の幅を広げていらっしゃいます。

もっと面白いお話がたくさんありのようでしたが、時間切れとなり、最後まで興味のつきない講演となりました。(S52卒)

## 平成 24 年度総会が開催される

5月26日(土)、川瀬治子さんの進行により平成24年度総会が開催された。代表の稲見和子さんから「OGネットワークが来年設立10周年を迎えること、そして今後も和やかで柔軟性のある会でありたい」との挨拶があり、会はスタートした。

●総会・昼食・懇談

11:00~13:15

●文芸サロン講座

13:30~15:30

講師:放送作家 松崎まこと氏

●場所:共立女子大学本館103号室

●出席者:37名



### 【議事1】平成23年度経過報告

①平成23年度活動報告

会報・資料整理・文芸サロン講座・共立祭・在校生支援といった各部門から23年度の活動内容を発表

②平成23年度収支報告

収支報告と監査報告

### 【議事2】役員退任に伴う後任者の件

副代表 森田久枝さん(S54卒)が諸事情により退任されたため、その後任として斎藤和子さん(S48卒)が指名され、承認された。

### 【議事3】各部門から平成24年度の活動内容を発表

会報:「文芸OGネットワーク通信17号・18号」を発行。

劇芸術関連の資料整理:共立祭の展示(ハムレット)準備を開始。  
文芸サロン講座:講師(松崎まこと氏)の紹介。

共立祭:平成24年度共立祭参加・シェイクスピア(ハムレット)展示、ティールーム、バザーを開催。

在校生支援:就活イベントを3回開催。

会計:平成24年度予算案が承認された。

10周年プロジェクト:文芸OGネットワーク設立10周年に向け、記念品やイベントなどの企画を検討中。

### 【質疑応答】

## 薫祭

— 杉並学生寮 寮祭 —

望月 公恵

文芸OGネットワークの総会に参加した折に、共立女子大学創立者の一人である鳩山春子氏を取り上げた新聞記事が配布された。使命感を持って生きた方と知った。私が在籍していた4年間は初代学長にまつわるこんな思い出がある。

昭和45年の春から2年間、杉並学生寮に住んだ。最初の年の5月の連休が終わると、薫祭のポスターが貼られている。学長が快諾され、その年から、お名前を冠する寮祭となるのだという。

数日後、生まれ月で組を作り、出し物を決めた。練習が始まると、寮内の行き来は別の階や棟にも広がり、日毎に知り合いが増える。

ただ、私は生まれ月とは違う11月の組に引き抜かれた。出し物は「West Side Story」の何曲かを踊るのだが、「Tonight」のMaria役に小柄な私が必要なのだという。

本番までの2週間は練習に没頭した。ダンス部の部長が考えた振り付けは踊りやすかった。踊りの練習のない晩は、覚えた英語の歌詞の発音をチェックされる。レコードの歌に口が合いやすいし、雰囲気があるのでと言われてのことだったが、実

際に踊ると、Tony役がボーイッシュだったこともあり、胸がときめいた。

薫祭の朝、鳩山学長が見えるとの放送が入り、寮中が湧き立った。入学式のときに壇上からの挨拶でしかお目にかかれない雲の上の人のような存在である。

会場に向かうと、前列中央に、学長はクリーム色のお召し物に黒い羽織で端然と座っておられる。

舞台の袖で深呼吸をしながら出番を待った。「Tonight」の前奏が始まる。軽くステップを踏みながら、舞台中央に進み出ていった。

(S49卒)

## 連載 私の学生時代 — 文芸学部で学んだ日々③

今回の「私の学生時代」は、2期生の仙葉弘子さんと杉浦秀子さんに書いていただいた。

仙葉さんは大学3年の時（昭和31年）に体験した学内対抗ボートレースの思い出を、杉浦さんは、やはり3年の時、放送研究会の部員の一人としてドラマコンクールに初参加したときの思い出を語ってくださいました。

### 学内対抗ボートレース

水面をすべるように進むボート。何気なく目にしたテレビ「ちい散歩 戸田」で、地井武男さんが4人漕ぎのボートに混じって楽しそうに笑っていた。「あっ」と私は50年も昔のジリジリとした秋の日差しを思い出した。

文芸3年の前期が終わった頃、ホームルーム単位の学内対抗ボートレースの募集があった。私たちはさっそく応募し、授業をやり繰りして戸田ボートコースへ練習に通った。

5人揃って赤羽からバスに乗り、土手道を歩いて行くと、限りなく大きなプールに辿り着いた。両岸には大学や企業の艇庫が立ち並び、その中に女子大では唯一の共立の艇庫を見つけた。1階には何艘ものボートが納まり、2階は合宿所になっていた。

長さ10mを越すボートをみんなで岸まで運び出し、ボート部員にいろいろと指導を受けた。オールも背丈の倍以上でかなり重い。ボートの席の下にはレールがあり、足をしっかりと固定して膝をちぢめる。4人で気持ちを合わせてオールを漕ぎながら足を蹴ると、シートが後ろに滑り体がまっすぐに伸びる。ボートは漕ぎ手の後方へ進み、最後部席のコックスが進行方向を見定めて号令をかける。腕で漕ぎ足を蹴り、思いっきり練習をした。終了後は汗まみれのままボートやオールを運び上げ、布で拭き、油を要所にいねいに塗った。

試合当日10月20日はカンカン照りの秋晴れだった。付け焼刃のボートレースは、ブイからブイ迄ほんの500mだったが、どの艇も位置に着くのに苦労した。3艇ずつ並んで戦い、私たちのコメント号

は、1回戦はビリ。でも敗者復活戦で一番になり、めでたく総合第3位となった。

当時、ボート部員は大勢いたが、今はどうなっているのだろうか。今私が学生だったらボート部に入りたいと思う。あの重いオールの感覚、風を切るスピード感、吹き出す汗、みんなと一致協力の楽しさなどは、学生時代の貴重な思い出の一つになっている。

仙葉 弘子 (S33卒)



5人の仲間 (仙葉弘子さん提供)

### 放送研究会と私

平成15年、文芸学部50周年の記念式典に出席した私は、新校舎ロビーに飾られたガラスケースの中の展示品の一つに目を奪われました。

それは、私が放送研究会（放研）のクラブ員であった時、大学放送連盟主催のドラマコンクールにわが放研が初参加して最優秀作品に輝いたものでした。

澤田玲子（1期生）作「鉾山(やま)に生きる」のドラマが録音された懐かしいテープと台本が当時のままに飾られていたのです。テープの箱の文字は、まぎれもなく私の筆跡でした。

当時3年次であった私は、それまで手がけたこともなかった演出という大役を引き受け、3ヶ月にわたり放研の仲間達とこの作品を作りあげたのでした。声

優・音楽・効果・技術・進行と各分野のチーフのもとにクラブ全員が参加して完成させていきました。バックミュージックとしてはチャイコフスキーの「悲愴」を用い、場面場面において効果的に使い、台本をより生かすことができました。

最後の収録が近づく頃はシーンと静まり返った暗い校舎の中で放研の部屋だけが煌々と光を放っていました。ドラマの録音が完成したときは、ホッとした安堵感に包まれましたが、また不安もありました。しかし、クラブ全員には、力の限り尽くしたという達成感がありました。それがまさか、最優秀作品に選ばれるとは……。脚本の良さは無論のこと、放研全員が一つの目標に向かって頑張ったからこそこの賞を勝ち得たのだと思います。この年は文芸学部が発足して4年目

にあたり1年次から4年次までそっくり賑やかに活気に満ちた年でした。

小学生のころから、私の夢はアナウンサーになることでした。放送演劇（芸術学科）を志望して、共立女子大に学べたことに感謝しています。学生時代は、放研で学んだり、アナウンスアカデミーに通ったり、他大学のミュージカル劇団に入り、舞台上に立ったり、地方公演に参加したり、前向きに歩いてきました。卒業時には就職は鍋底景気という時代でしたが、札幌・名古屋・東京と、アナウンサーの仕事を10年余り続けられたことは幸せでした。今でも先輩や友人に会う時は、アエイウエオアオ、カケキクココと、声を出しながら胸を膨らませて家を出る私です。

杉浦 秀子 (旧姓：池田) (S33卒)

## 在校生支援から

### 在校生1~4年を対象にした「就活体験を語る会」を開催

昨年より新たに始まった在校生支援プロジェクトでは、7月7日(土)、今年度第1回目となる“シェウカツ”イベントを開催した。「就活体験を語る会」と題して、ゲストのOG5名を迎え、体験談、Q&A、懇談の構成で約2時間行われた。

今回は、就職進路課の多大なるご協力により、在校生に関心の高い業種に就いているOG5名を招くことができた。瑞々しさとタフさを兼ね備えた、魅力あふれるメンバーであった。

内定をつかむまでのリアルなプロセスやユニークな面接攻略法、実際に仕事についての“ここでしか聞けない”エピソードなど、どれも興味深い内容で気づくと私自身も彼女たちの話引き込まれていた。きっと、当日参加してくれた学生さんたちにも、一歩先を歩いている頼もしいOGからのエールが届いたことと思う。

もちろん学内でも様々な形式で就職活動へのサポートは行われているが、今後もOGならではの“ほっこり感”を漂わせつつ、学部、進路課、在校生など多方面からのご意見を参考に、手探りしながら企画を練っていききたいと思う。

高橋京子 (H1卒)

データ 出席者:37名 ゲスト:5名  
学校関係者:3名 OG ネット:8名



イベント終了後もゲストへの質問が途切れることなく続いた

## 掲 示 板

### 共立祭

日時:10月20日(土)・21日(日)

場所:本館310号室

展示:ハムレット(劇芸術資料室に保存されている資料、ポスターを中心に展示)

他に、お茶のコーナー/バザー/各部門の活動報告の展示等

## 劇芸術資料室から

演劇資料の整理をしながら、共立の「先輩力」というものは素晴らしいとつくづく思う。

卒業して30年経つのに、「お若いかな!」と呼ばれて「ハイハイ」と返事しているのも可笑しいが、20年先輩だと言われるのもそれも仕方ない。この先輩方の会話は、すべて録音して、ラジオ番組にしてもいいと思うほど、話題が豊富で内容が濃い。政権の話も、政治家の生い立ちや趣味嗜好に始まり、どこから仕入れてくるのか、外国の王室内部事情、もちろん演劇論、役者の芸歴、芸風、スキャンダルまで、音楽会、展覧会、季節の山野草、珍しい食材の調理法……。ハイソで知的で為になる。今のワイドショーのコメントーターを全員クビにして、先輩

たちを並べたら、TVも、いい番組ができるものを――。

私は、卒業後しばらく、資料整理を手伝うという口実で、劇芸術研究室に出入りしていたことがある。劇作家、川崎照代さんが助手の頃で、彼女は10年先輩にあたる。私は、川崎作品の、情が深く、真摯で深い登場人物達が大好きだが、最も尊敬するのは、その卓越した整理能力だ。「あのね、ここをこうすると、もっと収納できるし、見やすいでしょ」と指摘されたことは数知れず、それが、その後の生活に大いに役立った。閉まらないスーツケースを閉める役が回ってくる。

本や授業で学ぶだけではない「先輩力」がここにもある。実感したいと思う私より年次の若いかに、資料室を訪ねることをぜひお勧めしたい。

井上英子 (S55卒)

## 編 集 後 記

大学卒業後、仕事に就けるかどうかは切実な問題である。松崎まこと氏は「ケ・セラ・セラ…」と演題で表現し、仕事についてお話しくださったが、「書く」実力をつけて仕事を引き寄せた方と拝察した。

これまで「通信」では「就職活動支援」としてきたが、総会で「在校生支援」という部門名への変更が報告されたことを受けて、「在校生支援」に名称を変えた。目前に迫った就活の具体的なノウハウにとどまらず、これからの生き方という意味でも在校生に役立つ支援を目指したい。

今号に原稿をお寄せくださった方々そして、構成を手伝ってくださった方、ありがとうございました。(E)

### 訂正とお詫び

先号「通信16号」の発行日が間違っておりました。正しくは「2012.3.24」です。

訂正し、心よりお詫び申し上げます。

編集部